



Title	1920~30年代における日本少年赤十字の「国際通信交換」
Author(s)	ベレジコワ, タチアナ
Citation	間谷論集. 2020, 14, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89865
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

1920～30年代における日本少年赤十字の 「国際通信交換」

ベレジコワ タチアナ

〈キーワード〉 少年赤十字 国際通信交換 国際文化交流

はじめに

「国際通信交換」とは¹、各国の少年赤十字団員の間で、アルバムや手紙、人形、玩具、手工芸品などを交換するという活動である。詳細は後述するが、この活動は、第一次世界大戦中、アメリカ少年赤十字団員が戦争から逃げたヨーロッパの子どもたちへ慰問文や物品を送り、返礼として礼状や図画などを返送されたことから始まった。そして、平時になると、国際通信交換は自国の文化や、少年赤十字団員たちの活動などを他国の団員たちに紹介するツールにまで発展した。この活動は、教育の面からのみならず、世界平和と国際理解の面からも非常に有効なものとして評価された。そして、少年赤十字が設立された各国の子どもたちは、この活動に夢中になり、特に 1920～30 年代において、世界各国の間で多くの物品が交換されていた。

日本少年赤十字は、1922 年の創立以降、急速な発展を遂げた。日本少年赤十字団員たちは、国際通信交換に多大な力を注ぎ、多くの国と交流を行っていた。1930 年代になると、日本少年赤十字の団員数、そして国際通信交換の回数は、アメリカに次いで世界 2 位になるほど、日本少年赤十字が発展してきたのである。

本稿は、1920～30 年代における日本少年赤十字の団員たちによる国際通信交換の歴史的展開を追っていくものである。具体的には、日本における少年赤十字の創立とその規模の拡大、国際通信交換の範囲、主要な相手国と国際通信交換の回数の変遷に注目する。そして、日本少年赤十字の指導者が子どもたちの国際交

流に対してどのような期待を抱き、どのような意義を見出していたのか、当時の資料に基づいて明らかにする。これによって、少年赤十字の国際活動の歴史、そして急速な発展の理由が明確になるほか、近代日本における子どもたちによる国際文化交流の一側面がより明らかになるだろう。

本稿において国際通信交換の歴史を明らかにするために、日本赤十字と日本少年赤十字が発行していた機関誌を始めとする資料を使用した。具体的にいうと、子ども向けに出版された『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』（日本少年赤十字の機関誌：1926年～1943年季刊発行）と、『少年赤十字 = The Kyoto Junior Red Cross』（京都支部の機関誌：1924年～1934年月刊発行〈以降未詳〉）、そして指導者向けに出版された『海外少年赤十字彙報』（1928年～1942年季刊発行）、赤十字社員向けに出版された『博愛 = La humanité』（日本赤十字の機関誌：1891年～1951年月刊発行）、さらに東京の赤十字博物館の資料付録として発行された『日本赤十字社参考館報』（展示資料集：1927年～1944年不定期刊発行）という五つの雑誌を使用した。また、少年赤十字に関する統計データが収録されている『事業年報』（1924～41年）を一次資料にした。

さらに、日本とアメリカの交流の展開を明らかにするために、アメリカ国立公文書記録管理局・アーカイブス・カレッジパーク（アーカイブスII）において保管されている資料も用いた。

次に、日本少年赤十字の国際通信交換が先行研究において、どう論じられてきたのか、紹介しておこう。

日本少年赤十字の国際通信交換については、榊居孝による一連の研究がある。榊居の研究によって、機関誌『少年赤十字』が誕生した時代や、日本少年赤十字の創設や雑誌の発行に関わった人物²、近代日本における国際理解教育の実態と少年赤十字が果たした役割、交換品の大半を占めた交換アルバムの様相、交換アルバムと『少年赤十字』という雑誌が戦後長い間忘れ去られていた理由など³が明らかにされてきた。榊居の研究は、日本少年赤十字の国際通信交換の一端を明確にするものであり、様々な点で重要な成果を挙げている。ただ、国際通信交換の歴史的発展が具体的に述べられていないだけではなく、その規模と範囲、とりわけ主要な相手国と交換の回数、指導者の評価などといった具体的な点について

の言及はなく、抽象的な記述にとどまっている。さらに、日本少年赤十字団員による国際人形交流については、一連の拙稿がある⁴。

先行研究の中には、第二次世界大戦後の状況を取り上げているものもある。橋本祐子はアルバムが国際通信交換の伝統的な手段であることを指摘し、それを応用することを提案している⁵。そして、山本孫義は、通常の通信交換や日米クリスマス贈物交換が行われた際に、「毎年、人形、手工芸品、玩具等」が交換されたと述べている⁶。ただ、双方とも第二次世界大戦以前の実態についての言及はほとんどない。

以上のように、これまでの先行研究では、1920～30年代における日本少年赤十字の国際通信交換の歴史的発展がほとんど注目されてこなかったのである。

最後に本稿の構成を説明して本文に入りたい。まず、第1章では、少年赤十字の誕生、その理念と方針を説明した後、少年赤十字はいかにして国際通信交換をその活動の範囲に取り入れたのかに注目する。そして、第2章では、国際通信交換の展開を具体的なデータを取り上げながら、その歴史的発展を追っていく。さらに、第3章では、国際通信交換の評価、特に教育的な価値などについて述べる。最後に、全体をまとめて、稿を閉じたいと思う。

ちなみに、本稿の引用は、読みやすさを考慮して必要な箇所以外はふりがな(ルビ)と記号を省き、二字以上の繰り返し記号に該当する箇所にはそれに相当する文字を当て、そして漢字を通用するものに改めたことをあらかじめ断っておく。

1. 少年赤十字の誕生

1-1. 理念と方針

少年赤十字は、第一次世界大戦中、赤十字の活動を援助するために、アメリカやカナダを中心に始まった運動である。赤十字という人道団体の設立は、19世紀の半ば頃であり、少年赤十字より約半世紀も早い。赤十字の設立者の一人、スイスの実業家アンリ・デュナン(1828～1910)は、戦傷兵、戦病兵を敵・味方の差別なく救護する必要性を、欧州主要各国に訴えた。彼の提案が反響を呼び、赤十字という人道団体が実現されたのである。赤十字の理念としては、国籍や人

種、宗教や政治的な関係の区別なく戦争の犠牲者を救護する中立性⁷と人道主義、個人や国家としての利益を求めない無償の奉仕とボランティア精神、そして最新の科学知識に基づいた専門性が挙げられる。

時間が経つにつれて、赤十字の活動の範囲は徐々に拡大していき、次第に戦傷兵、戦病兵だけではなく、戦争孤児を始めとする戦争の犠牲者の救済、さらに第一次世界大戦の終戦後は、戦災復興のほかに、災害の救済にも及んでいった。

赤十字は、欧州諸国だけではなく、1877年には日本（当時は博愛社、1887年に日本赤十字と改称）、1881年にはアメリカなど、世界の多くの国々と地域において創立され、国際的な団体にまで発展していった。

少年赤十字は、赤十字の理念と方針を受け継いだものであり、第一次世界大戦中、赤十字の救済活動の支援のほかに、国籍や人種などを問わず、災害に遭った他国の子どもたちの救済、公共施設の復興に尽力した。つまり、少年赤十字の初期の活動は、戦争の被害者の救済を中心としたものであった。国際通信交換がいかにして少年赤十字の活動の中に取り入れられたのかを、次節で見てみよう⁸。

1-2. 戦争被害者の救済から子ども同士の国際交流へ

1917年にロシア革命の戦乱から逃げた子どもたちは、アメリカの子どもたちから送られたクリスマス・プレゼントやカードの返礼として、感謝に満ちた礼状を送った。これを受け取ったアメリカ少年赤十字の指導者たちは、「今こそ国際親善の為大々的な運動を起すべき時であると思ひ立ち、色々考へた末、国際間で通信物を交換し、互ひに親善の意を表はすといふ計画が案出」されたという。これが、少年赤十字の国際通信交換の始まりだとされている⁹。

1920年にスイス・ジュネーブ赤十字社連盟の第1回総会で、平時事業の一環として「少年赤十字」を創立することが決議された。1922年5月、日本赤十字は、この決議を全国の支部に通知した。そして、同年に、日本で最初の少年赤十字団が正式に創立されたのである¹⁰。日本初の少年赤十字団は、滋賀県の守山小学校で設立されたものであった。団員数は1900人だったという¹¹。同年中には埼玉、秋田、翌年には東京、京都、大阪、兵庫、群馬、茨城、山梨などにおいても少年赤十字団が結成されたようだ¹²。この時、全国の少年赤十字団の指導を

担ったのは、井上圓治調査部長であった¹³。初期から団員が最も多かったのは、群馬支部、京都支部、兵庫支部であり、京都支部は独自の機関誌を発行するほどであった¹⁴。ただ、本稿は紙幅が限られているため、各支部の発展や、外国との交流の状況は、今後の課題にしたい。

少年赤十字の目的について、赤十字社連盟スイス部長で少年赤十字部長を兼業していたライマン・ブライスンは、以下のように説明している。一つ目の目的は、「少年少女をして、彼等自身の健康に注意せしめると同時に、他の国の少年少女の健康にも注意」させること、そして二つ目の目的は「児童を善良なる市民となるやうに教育すると同時に、児童の頭から『戦争』という観念を取り去らせること、三つ目の目的は「各国民間の好感、諒解の目的のためにこの少年少女赤十字を善用して、各国民がともに世界平和のために努力する」ということであった¹⁵。つまり、世界平和と国際理解に貢献することが、各国の少年赤十字の一つの大きな目的であったことがわかる。ちなみに、同じ年に創立された日本少年赤十字の目的も「健康保持と促進」、「社会奉仕」と「国際親善」であった¹⁶。

1-3. 日本少年赤十字の発展

1922年に創立された日本少年赤十字は、上記の三つの目的に沿って徐々に活動を展開していった。まずは、日本少年赤十字の歴史的展開を明らかにするために、その規模の発展を表す具体的なデータを見てみよう。以下の図は、日本少年赤十字の団員数が着実に増加していく傾向を表している（図1）。

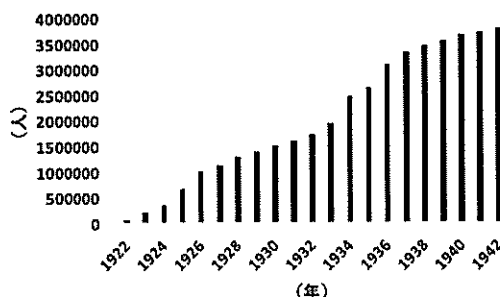


図1：日本少年赤十字団員数（1922～42年）¹⁷

1935年に団員数は2,500,000人を超え、団体数も8,000団¹⁸にのぼった¹⁹。当時の小学校の数は25,000校余、そして中学校の数は500校余²⁰であったから、この時期、約30%の学校が少年赤十字に加盟していたことがわかる。それ以降も、団体数と団員数は着実に増え続け、1939年には約40%に達した。

さらに、世界における日本の位置を見ると、1929年の世界各国の少年赤十字団員数のランキングにおいて、アメリカが1位（約7,375,462人）、イタリアが2位（約1,500,000人）、日本は3位（約1,350,000人）であった²¹。だが、その6年後の1935年には、日本はアメリカに次いで、世界2位になった²²。つまり、日本少年赤十字は、団員数のランキングにおいて、早い時期から世界各国の中で上位を占めていたことがわかる。

少年赤十字は、日本だけではなく、世界各国においても急速に規模を拡大していった。その理由について、日本赤十字社調査部青少年赤十字課長であった手塚義明は以下のような記述を残している。

少年赤十字が国際的に大発展を示して居るといふことは赤十字が国際的に極めて有力たる連結協力の機関を有して居ることに基因して居ることは言ふを須ひません。現在各種の国際組織の中でその範囲に於て其の結合力に於て赤十字の国際組織が最も有力なるものの一であることは何人も首肯する所であらうと思ひます。〔中略—以下、引用文中の〔〕内は筆者〕其の根本的の理由は少年赤十字が純乎たる学校少年団であり、学校教育の実践訓練機関であるといふ点にあると存じます。〔中略〕少年赤十字は〔中略〕学校教育の効果を挙ぐることを目的として学校内に設けられた校長を団長とし生徒児童を団員とする純粋な学校少年団であるのであります²³。

少年赤十字が急速に拡大していった原因は、国際舞台において赤十字の有力な連結性と協力性を有するということに加え、少年赤十字の活動が学校教育の一環として効果を上げているからであるという。

前述したように、少年赤十字は、「健康保持と促進」、「社会奉仕」、そして「国際理解と親善」という三つの目的を掲げて、活動を行っていた。三つとも教育関

係者の間で知識を実際に応用できる機会として高く評価され、少年赤十字の活動が子どもたちにとって重要で不可欠な体験であるとされていた。その中で国際理解と親善を目的とした国際通信交換は、他国の子どもたちと交流できる機会として当時の子どもたちにとって非常に魅力的なものであり、教育関係者や少年赤十字の指導者によって世界平和に貢献できる活動として高く評価された。国際通信交換の具体的な評価に入る前に、日本における発展の様相を、アメリカの状況と比較しながら見てみよう。

2. 国際通信交換の展開

2-1. 交換の規模

日本少年赤十字団員たちによる国際通信交換は、1923年に始まった²⁴。この年に起こった関東大震災は、その活動を大きく促進させるものとなった。日本少年赤十字団員が被災者の救済に加わったことによって、少年赤十字の名が日本において広く知られるようになった²⁵。それだけではなく、他国の少年赤十字団員たちから慰問品を受け取ったことをきっかけに、日本少年赤十字団員たちが国際通信交換を始めたのである。関東大震災の際に外国の少年赤十字団員から送られた慰問文や慰問品について、日本少年赤十字の機関誌は以下のような紹介をしている。

一九二三年（大正十二年）の大震災に際し、日本少年赤十字団員は、他の諸国、殊に加奈陀、北米合衆国、波蘭及チエツコ・スロバキアの少年赤十字団員と同様に被害者に対して、手助けとなりました。それで災害に遇つた子供等は被服、書籍、其他の学校用品及「クリスマス」贈物を他の少年から配給されました。又日本少年赤十字団員は外国の小さいお友達に感謝の意を表する為、礼状を送り、之に図書、絵葉書、複写名画、水彩画を施せる箱、其他の珍らしき品物を送りました²⁶。

他国（特にカナダ、アメリカ、ポーランド、チェコスロバキア）の少年赤十字団員たちは、服や文房具、そのほかの学校用品、そしてクリスマス・プレゼント

を日本の子どもたちに送った。それに対し、日本の子どもたちは、この善意的行為に対する返礼として、礼状や図画、絵葉書などを返送したのである。これによって、少年赤十字の国際通信交換が日本においても注目され、その規模は次第に広がっていった。

図2は、1924～42年における国際通信交換回数の推移を示したものである。この図では、日本少年赤十字から発信された通信物の数を「発信数」、日本少年赤十字が受け取った通信物の数を「受信数」、そして、前者と後者を合わせた数を「総数」とした。

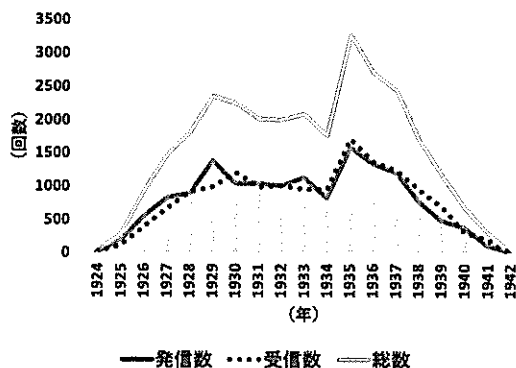


図2：日本少年赤十字の国際通信交換回数（1924～42年）²⁷

まずは、総数について見てみよう。国際通信交換の回数は、1929年までの6年間、急速に拡大していき、1929年になると、低減する。そして、それから6年間、ほぼ毎年減少傾向を示した後、1935年に再び飛躍的に増加して頂点に達し、さらに第二次世界大戦の勃発までの期間、再び急速に低減していく。発信数と受信数の線も似たような傾向を示している。

このような変動の理由について、次のようなことが考えられる。まず、1929年頃の低減の理由は、おそらく1929年の世界恐慌の影響であると思われる。世界恐慌によって大きな打撃を受けたアメリカの少年赤十字が、似たような傾向を示しているのか、興味深いところであるが、実際にアメリカ少年赤十字の国際通

信交換の状況を見てみると、やはり 1929 年以降は日本と同じく回数に低減傾向が見られる。これが 1933 年頃まで続いたのがわかる（図 3）。

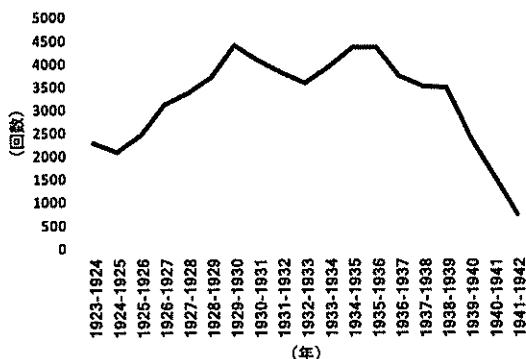


図 3：アメリカ少年赤十字の国際通信交換回数（1923～42 年）²⁸

日米両国において、世界恐慌による国際通信交換の勢いの低減はあったが、その低下はそれほど大きいものではなかったようだ。そのことは、例えば、次のような言説からわかる。世界恐慌の中の通信交換に関して、日本赤十字社調査部長であった井上圓治は、「世界的不景気にも拘らず、〔中略〕〔世界各国の少年赤十字の〕發送数の増加してゐる」と述べている。数字でも確認してみよう。世界各国の少年赤十字の合計發送数は、1929～30 年は 4,851 回、1930～31 年は 5,657 回、そして 1932～33 年は 5,683 回であったという²⁹。つまり、日本とアメリカにおいて、通信交換の回数は低減したものの、世界全体の傾向を見ると、むしろ増加している、と井上調査部長は報告しているのである。ちなみに、「特に顕著な増加を示した」のは、フランス、ドイツ、ニュージーランド、ポーランド、スウェーデンとユーゴスラヴィアであったという³⁰。

ちなみに、井上調査部長は、世界恐慌の国際通信交換の回数だけではなく、その内容についても記述を残している。

然し、発送数が増加したとか、国と国との接触数が増加したとかいふことだけでは、通信交換に対する少年赤十字団員の理解の程度を十分に明かにしたとは云へないのです。それは交換物の内容如何が、寧ろ重要であると思ふが、この点は更に驚くべき発達を遂げて来てゐます。暫に学童の作品が改善せられつゝあるのみならず、付属の文書に見て、段々真情をこめて来てゐるのです。中には送先きの何にかの出来事に祝意を表するとか、災害の見舞などにまで及んでゐるところなどは、相手方の安否にまで心を配つてゐるといふことがよく判つて、少年赤十字の趣旨が漸次に理解されて行きつゝあることを、はつきりと知ることが出来ます³¹。

ほぼ10年間続いている世界各国の国際通信交換は、着実に回数を増やしているだけではなく、その内容からも団員たちの少年赤十字の趣旨の理解が深まったことが窺えると井上は報告しているのである。子どもたちが心情を込めて相手側の祝意や見舞いの言葉、安否の確認などに配慮している点が、理解の深化を具体的に示しているという。つまり、日本とアメリカの場合、国際通信交換の回数は低減したものの、ほかの国（特に、フランス、ドイツ、ニュージーランドなど）は増加の傾向を示し、それによって世界各国の通信交換の総数はむしろ増加したのだということがわかる。

同時に、この時期は、1931年の満州事変、1932年の第一次上海事変、1933年の日本の国際連盟脱退などを巡って、日本の国際関係が悪化していく時期でもあった。このような政治的な状況が、日本少年赤十字の国際通信交換の発展、そしてアメリカとの交流にどのような影響を与えたのかについて、7年間、アメリカ赤十字本社で秘書を務めた森秀臣は、以下のように説明している。

本年三月〔1932年のこと〕、あの上海事件の際、米国の各新聞は盛んに日本の悪口を書きました。在留邦人は大変な苦痛を感じ中には帰朝をした人も大分ありました。米国少年赤十字の本部にても、事、重大なりと感じ、内々排日的の少年赤十字団が出来て、我が通信物を拒絶する様なことがないかと調べましたが、全国に於て一つもなく、却つて日本に興味をもつて通信を致し

たいと云ふ少年赤十字団が多くなつて参りました様な次第でありました。私は真の国際間の平和は実に少年赤十字団を通じて出来るものと信じます。これ等の少年赤十字団員が持つ親日的純情は今後、十年、二十年後に必ず現はれて来るものと信じて居ります³²。

国際緊張が高まる中で、アメリカの新聞は日本の行動を批判していた。ところが、アメリカ少年赤十字団員たちは、日本からの通信物を拒絶するどころか、かえって関心を持って、もっと積極的に交流したいという気持ちを持っていることが、アメリカ少年赤十字本部の調査によってわかったという。ただ、この時期は、世界恐慌、そして政治的な摩擦の影響が全くなかったわけではないが、現時点の資料だけでは、1930年代における政治的な摩擦などの影響を正確に把握することは非常に困難である。なぜなら、赤十字と少年赤十字は、宗教と政治的な事情に対して中立的な立場を保っており、救済活動や国際交流が宗教や政治に左右されることを避けるという方針を取っていたからである。こうした理由から、戦争や政治的な摩擦が起こり、実際の活動に変化が及んだとしても、対立する国や地域に関する記述や、対立に関する意見などが機関誌に掲載されることはなかったのである³³。ちなみに、これは日本の場合だけではなく、アメリカやカナダにおいても見られる傾向である³⁴。さらに、詳細は後述するが、1930年以降のアメリカと日本の国際通信交換の回数が低減するのは、両国が相互に国際通信交換を減少させていったからであろうと推測される。

そして、1935年になると、通信交換の回数は再び増加の傾向を見せる。交換の回数も相手国の数もこの時、ピークに達した（図4）。その理由としては、1934年10月に東京において開催された第15回赤十字国際会議の影響があったからだと考えられる。赤十字運動の最高議決機関である赤十字国際会議は、ワシントンでの1回を除いて、4年ごとに欧州諸国を会場に開かれていたが、1934年、日本での開催がアジアで初めての開催となった。この会議には、54カ国、45政府代表を含む319人が参加したという³⁵。そして、各国の少年赤十字の代表者もこの会議に参加し、少年赤十字国際展覧会が開催されたので、この会議は日本赤十字だけではなく、日本少年赤十字にとっても重要な行事であったと考え

られる。ちなみに、少年赤十字国際展覧会では、29カ国の作品が出品されたという³⁶。つまり、この会議の影響があって、世界各国の子どもたちと日本少年赤十字団員の国際交流が促進されたと推測できる³⁷。

さらに、1935年には、パリにおいてフランス少年赤十字主催の人形展覧会が開かれ³⁸、またブダペストにおいてハンガリー少年赤十字展覧会が開かれたが³⁹、この際、各国から人形やアルバムを始めとする多くの出品物が発送され、主催国からの返礼の品々も届けられた。これらの展覧会には、日本からも多くの出品物が送られ、これによって国際通信交換の回数が上昇したということも推測できる。

ちなみに、アメリカの場合は、世界恐慌による低減の回復は、日本より早い1933年頃であったようだ。そして、日本と同じように1935年が交換のピークとなり、これも日本より長く1934年の後半から1936年の前半までの約2年間続いていた。また、アメリカ少年赤十字の国際通信交換の変動の全体的な傾向を見ると、日本と類似しているところが多く見られるのは興味深い(図3)。その理由については、次節で述べる。

2-2. 各国との関係

日本少年赤十字の相手国の数の変遷をグラフにしてみると、その傾向が図2と類似していることがわかる(図4)⁴⁰。日本少年赤十字は、1923年に7カ国と交流していたが、1928年になると、その数は34カ国に及んでいる。そして、1929年に一旦減少した後、1935年までは緩やかな増加傾向にあった。さらに、1935年になると、39カ国まで上昇し、それ以降は、第二次世界大戦が勃発するまでの間、徐々に低減していったのである。

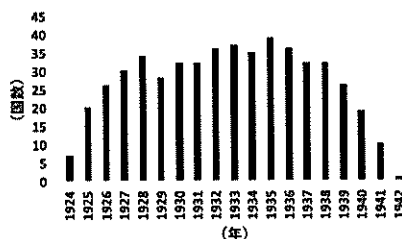


図4：日本少年赤十字通信交換の相手国数（1924～42年）⁴¹

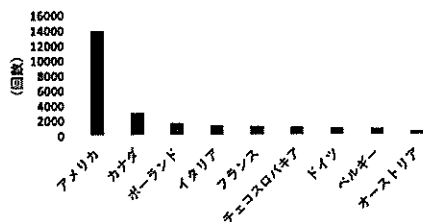


図5：日本少年赤十字の国際通信交換の相手国（1925～41年の交換総数に基づいた上位の9カ国）⁴²

図5は、1925～41年の受信と発信の回数を合わせて、19年間の総数を計算し、日本と最も交流が盛んであった国を交流回数の高い順に9位まで並べたものである。この図からわかるように、交流の回数が圧倒的に多かったのは、アメリカであった。19年間の受信と発信の回数を合わせると、1位を占めているアメリカ少年赤十字との交流の回数は、2位を占めているカナダ少年赤十字と比べ、約4倍以上多かったのである。そして、カナダとの交流は、3位を占めているポーランドと比べると、約2倍多かった。日本少年赤十字にとって、欧米諸国が最も主要な交流相手国であったこともこの図から確認できる。

ちなみに、日本にとって主要な交流相手であった5つの国との交流に関し、受信と発信を合わせた総数を、年次別にグラフにすると、以下のようになる。

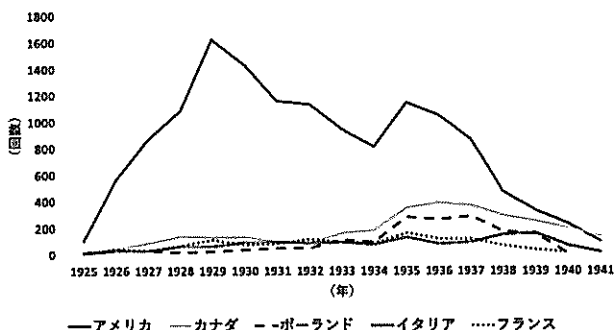
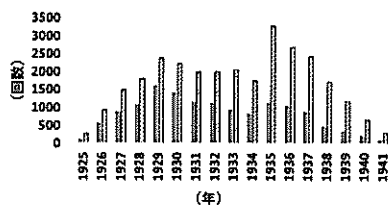


図6：日本少年赤十字と主要相手国との国際通信交換の総数（1925～41年）⁴³

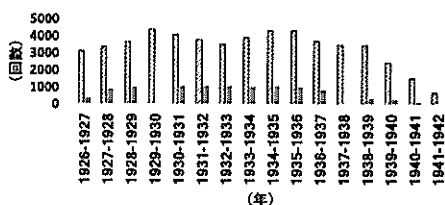
アメリカとの交流の変動を示す線は、図2に示されている傾向と類似している点がある。この線は、1929年までは上昇し、1929年に頂点に達する。そして、1929～34年は低下し、1935年には再び上昇する。そして、それ以降は、低下の傾向を示す。アメリカ少年赤十字は、日本にとって重要な交流相手であり、両国の交換の状況が、日本少年赤十字の交換回数の総数にも影響を与えたということが容易に推測できる。さらに、カナダ、ポーランド、フランスとの交流は、1934年以降、急激に上昇し、1937年になると低減したことが、図6からわかる。それに対し、イタリアとの交流は、1939年までは緩やかな増加を見せ、それ以降は徐々に低下していった⁴⁴。

つまり、各国との交流の変遷を見てみると、日本少年赤十字の国際通信交換の回数が1928年に急激に増加したのは、アメリカとの交流が盛んであったことが原因であり、1935年の増加は、アメリカだけではなく、カナダとヨーロッパの国々との交流が活発になったからであると考えられるのである。

さらに、日本の国際通信交換においてアメリカとの交流の割合を計算すると、次のようになる(図7)。



■ アメリカとの交換 □ 各国との交換 (総数)



□ 各国との交換 (総数) ■ 日本との交換

図7：日本少年赤十字の国際通信交換におけるアメリカとの交流の割合 (1925～41年)⁴⁵

図8：アメリカ少年赤十字の国際通信交換における日本との交流の割合 (1926～42年)⁴⁶

図7からわかるように、日本少年赤十字の国際通信交換におけるアメリカとの交流の割合は、1929年が最も高かった。それ以降は、交流の回数が緩やかに低減していき、1935年に一度増加し、そして再び低下の傾向を示した。このよう

な変動があったにも関わらず、アメリカとの交流は、日本少年赤十字の国際通信交換において非常に重要な位置を占めていた。1929年以降は、低下の傾向があったものの、ほかの国と比べると、アメリカとの交流の割合が最も高かったことも資料から確認できる⁴⁷。

ちなみに、アメリカ少年赤十字の国際通信交換において日本はどのような位置を占めていたのかも興味深いところである。図8は、アメリカ少年赤十字の国際通信交換の総数における日本との交流の割合を示している。アメリカ少年赤十字の国際通信交換における日本との交流の割合は、日本少年赤十字の国際通信交換におけるアメリカとの交流の割合と比べると、それほど高くないが、1927～36年が、総数の3分の1ないし4分の1を占めていることがわかる。また、各年の具体的な数字によると、ほかの国と比べて、日本との交換の割合が一番高かったことも確認できる⁴⁸。

一方、前述した国々との交流の回数と比べて、日本少年赤十字とアジア諸国との交流は、どうだったのだろうか。それは、欧米諸国と比べると、はるかに低いものであったことが確認できる。受信と発信の回数を合わせた19年間の総数を、日本が交流を行っていた国と地域について数えると、アメリカが1位（13,845回）であったが、フィリピンは22位（155回）、タイは26位（106回）だった。中国との交流はついに生まれず⁴⁹、ソ連との交流も一回のみで終わってしまい（1935年の少年赤十字の国際展覧会の出品）⁵⁰、それ以外のアジア諸国との交流はなかったようである。

ただ、第二次世界大戦の勃発後、欧米諸国との交換が中断される一方で、その代わりにタイ、満州国、中華民国、フランス領インド、蒙古聯合自治政府（南モンゴル）などに多くの通信物を贈るという計画が立てられた⁵¹。そして、戦況が悪化していくと、国際通信交換は完全に中断されることになったのである。

最後に、少年赤十字の国際通信交換の意義が教育関係者や、少年赤十字の指導者によってどのように評価されたのかを見てみよう。これによって、少年赤十字はなぜこれほど発展してきたのかがより明らかになるだろう。

3. 国際通信交換の意義

教育関係者や、少年赤十字の指導者は、国際通信交換が子どもたちにとって、様々な側面において勉強になると主張していた。例えば、子どもたちは、「いろいろと調査研究をいたしますから、交換物を作ることが既に教育にな」るし、相手側も交換品を受け取って新しい知識を得られるので、結果としては「送る方でも教育の為に利用し、受ける方でもこれを教育資料として利用」できるという⁵²。また、「価値ある教育資料が学校に蓄積せらるゝことによつて、教員方をも利する」ことができ⁵³、交換品は、「すべての教授科目によつて貴重なる生きた教材である。〔国際通信交換は、〕外国語の学習に役立つばかりでなく、地理、歴史其の他の教科の学習に非常な便益を真に与へ教育上欠くことの出来ぬものとなるに至つた」⁵⁴というのである。こうした言説が、教育関係者、少年赤十字の指導者が最もよく指摘した国際通信交換の教育上における効果であつた。

さらに、子どもたちが少年赤十字の活動を通じて、様々なことを実際に体験できたので、その教育的な効果が高いものとされていた。当時の教育関係者は、「主として児童の受容性におのみ訴へる教育法は既に陳腐のものとなり」、「児童に対して無暗に知識を注入しやうとするのは既に過去の教育法となつた」ので、「児童を自発的に実行させるやうに仕向けてゆく方が、その効果が著しい」と主張していたのである⁵⁵。また、「少年赤十字の仕事は直接日常生活の各方面に於て子供に実際の仕事をなさしめる、実際に当らせる実感に訴へると云ふやうな事をやる所のものでありますから、物質的方面に於ても精神的方面に於ても確かにこの教育上の重要な一原理である」⁵⁶ 体験教育⁵⁷に基づいているので、教育的には重要であると唱えていたのである。

一方、子どもたちには「災害、疫病、死亡、罹病といふやうなことの問題は知らさずに蓋をしておくべきだ、そしてそんな問題は大人だけで処理して仕舞ひ彼等には無益な心配をさせぬやうにしるのんびりと成長せさ」せればよいという考えもあった。これに対して、前出の井上調査部長は、「児童も大人に劣らざる勇氣を以て斯る諸問題によく対向し得る」し、子どもたちは「純真と誠実とを以て十分なる理解の下に問題の解決の為、大人に協力することを躊躇しない」ことが少年赤十字の活動によって明瞭になっているとの判断を示していた⁵⁸。

他方、前出の手塚青少年赤十字課長は、子どもたちが国際的に活躍することについて以下のように述べている。

次の時代を担任すべき少国民に対して国際的教養が如何に必要であるか〔中略〕言を須ひません。然も少年少女に体験を通して国際教養を与へるといふことは極めて困難なことであります。如何に整備した教育機構であつても一国内の機構では役立ちません。〔中略〕〔国際的教養は、〕恒久的国際機関によつて永続的に行はれて始めて其の効果を發揮し得るのであります。少年赤十字の国際学校通信交換の如きも実に赤十字社連盟といふ国際機関と世界五十数ヶ国の赤十字社の協力によつて始めて行はれる所のものであります。〔これによつて、少年赤十字は、〕国際親善に、文化の交換に重大なる寄與をなして居ます⁵⁹。

国際教育は将来を担う子どもたちにとって非常に重要なものであるが、その機会をよく整備されている学校さえ提供することが難しい。一方、国際的な団体である少年赤十字だと、世界 50 ヶ国以上の国と地域との交流の機会を提供することができるし、このような交流を継続的に維持することもできるので、少年赤十字の協力によって国際教育の実現が可能になると手塚は主張している。これによって、少年赤十字は、国際親善、そして文化の交換に寄与しているという。

ただ、時間が経つにつれて、国際通信交換は「一定の型にはまつた様になりつつ」あつて、「殆ど同種類のものを一時に数十冊製作し、なるべく多くの返礼品を予期すると云ふ傾向がある」という批判もあつた。これは「少年赤十字の精神に反するもの」であり、「通信交換物は一冊、一冊真心のこもつたものでなくてはならない」と前出の森は指摘している⁶⁰。

おわりに

以上のように、日本少年赤十字は、1922 年に創立され、それ以降大きな発展を遂げた。日本国内の中で、少年赤十字に加盟していた学校の割合は、1935 年には約 30%、1939 年には約 40%であり、団員数も毎年のように増加していた。

団員数は、1920年代後半には世界第3位、1930年代後半には世界第2位を占めていた。

1923年に始まった日本少年赤十字の国際通信交換も、約20年間で目覚ましい発展を遂げた。活動のピークとなった1935年には、日本少年赤十字は39カ国と交流を行い、多くの通信物を交換していた。相手国の中で、最も活発に交流が行われたのは、アメリカであったと本研究によって明らかになった。さらに、アメリカ少年赤十字にとっても、日本との交流は重要であったことが判明した。

さらに、日本の相手国の中では、カナダ、ポーランド、イタリア、フランスが上位を占めていたことも明らかになった。つまり、日本少年赤十字は、最大39カ国と交流の行い、その範囲は実に広がったけれども、多くの日本の団員たちは、主に北米、そしてポーランド、イタリア、フランスとの交流を行っていたと推測できるのである。一方で、アメリカと同じように、カナダとヨーロッパ諸国の子どもたちにとっても、日本は重要な交流相手国であったであろうという仮説が成り立つ。この仮説の証明は今後の検討課題にしたい。

本稿では、少年赤十字の発展を裏付ける国際通信交換の評価を当時の資料から確認することもできた。国際通信交換は、学校教育を補助し、その効果を向上させ、かつ国際平和と親善に寄与するものとして評価されることによって、その発展が促進されたと考えられるのである。

注

- 1 英語の資料では International School Correspondence という。
- 2 榎居孝『雑誌『少年赤十字』と絵本画家 岡本帰一』（竹林館、2002年）。
- 3 榎居孝「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920年代～30年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」（『戦争と平和：大阪国際平和研究所紀要』第12号、大阪国際平和センター、2003年）73-86頁。
- 4 ベレジコワ・タチアナ「日本少年赤十字の国際人形交流（一）－国際通信交換から国際人形交流まで－」と「日本少年赤十字の国際人形交流（二）－国際人形交流の展開と文化的役割－」（『人形玩具研究：かたち・あそび：日本人形玩具学会会誌』第28

- 号、日本人形玩具学会誌編集委員会、2018 年）161-171 頁、172-182 頁。
- 5 橋本祐子『青少年赤十字の歴史と組織と活動』（日本赤十字社青少年課、1955 年）89-101 頁。
 - 6 山本孫義『青少年赤十字教育の原理と実践』（教育出版社営業部、1949 年）152 頁。
 - 7 赤い十字架の標章も中立を保つスイスの国旗を連想させるものとして作られたものであるという。
 - 8 赤十字と少年赤十字の創立の歴史、少年赤十字の理念と方針については、前掲、榊居「大正期・昭和初期の国際理解教育」73-86 頁；榊居孝・森正尚『世界と日本の赤十字－世界最大の人道支援機関の活動－』（東信堂、2014 年）；Irwin, J. F., *Making the World Safe: The American Red Cross and a Nation's Humanitarian Awakening*, New York: Oxford University Press (2017) などを参照いただきたい。
 - 9 「学校通信は友を授ける道」（『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第 15 巻第 3 号、日本赤十字社、1940 年）17 頁。
 - 10 前掲、榊居・森『世界と日本の赤十字』303 頁。
 - 11 井上知則「学校教育の外延化と少年赤十字団活動」（『歴史のなかの教師・子ども』福村出版、2000 年）231 頁。
 - 12 前掲、榊居・森『世界と日本の赤十字』304 頁。
 - 13 井上園治（1872～？）は、1897 年に東京帝国大学薬学科を卒業し、陸軍の薬剤師になる。それ以降、陸軍軍医監などを経て、1922 年から赤十字調査部長として少年赤十字の指導を実施した。井上は、日本少年赤十字の機関誌における執筆のほかに、日本と他国における少年赤十字の活動に関する調査、会議の出席など、少年赤十字と関連する様々な事業や活動に取り掛かり、1940 年に退職した。（「井上軍医監が高文試験にパス」『読売新聞』1927 年 1 月 9 日朝刊第 7 面；日本赤十字社編『日本赤十字社史続稿』下巻（日本赤十字社、1929 年）1003 頁による）
 - 14 1924～42 年に発行された赤十字社編『事業年報』（日本赤十字社、1924～42 年）による。
 - 15 ライマン・ブライスン「日本に未だない少年赤十字」（『週刊朝日』第 2 巻第 22 号、朝日新聞出版、1922 年）13 頁。
 - 16 平山成信「少年赤十字とはどんなもの」（『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第 1 巻第 1 号、日本赤十字社、1926 年）1-2 頁。
 - 17 この図は、以下の資料に基づいて、筆者が作成したものである。前掲、日本赤十字社

- 編『日本赤十字社史続稿』下巻(1929年)1003-1004頁;日本赤十字社編『日本赤十字社史続稿』第4巻(日本赤十字社、1957年)5-15頁;日本赤十字社編『日本赤十字社史続稿』第5巻(日本赤十字社、1969年)270頁。
- 18 少年赤十字団の登録は、学校単位で行われ、校長が団長、教師が指導者、生徒が団員となり、個人や地域単位のものではなかった。
- 19 「日本少年赤十字国際通信交換状況一覧」、「日本少年赤十字団年次発達一覧」(両方とも『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第15巻第2号、日本赤十字社、1940年)21頁。
- 20 日本近代教育史事典編集委員会編『日本近代教育史事典』(平凡社、1971年)80頁。
- 21 「少年赤十字団員一千二百万」(『博愛 = La humanité』第516号、日本赤十字社、1930年)34頁。
- 22 野田義夫「教育の新思潮と少年赤十字(一)」(『博愛 = La humanité』第611号、日本赤十字社、1938年)30-33頁。
- 23 手塚義明「青年赤十字に就て」(『博愛 = La humanité』第633号、日本赤十字社、1940年)2-13頁。
- 24 日本少年赤十字の国際通信交換は1923年に始まったとわかっているが、この年の通信の回数を現時点では確認できないため、本稿では、1924年以降のデータを取り上げることにした。
- 25 前掲、榊居・森『世界と日本の赤十字』304-305頁。
- 26 「一、全世界に於ける少年赤十字」(『海外少年赤十字彙報』第1号、日本赤十字社、1928年)1-3頁。
- 27 図2は、前掲、赤十字社編『事業年報』(1924～42年)、そして前掲の榊井「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920年代～30年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」、81頁のデータに基づいて、筆者が作成したものである。
- 28 File: Dr #49(5b) Records – ANRC – Junior Red Cross, International School Correspondence, 1919-44; Monographs; 1946-1986 (Entry # P83, Box # 146); American Red Cross/Historical Division; RG Records of the American National Red Cross; National Archives at College Park, College Park, MD. なお、アメリカ少年赤十字の国際通信交換に関する統計データは、7月から翌年の6月までの期間をもとにして計算されているため、図3では、各データに相当する期間(例えば、1923～1924年)を示すことにした。
- 29 井上園治「昨年度に於ける交際学校通信」(『博愛 = La humanité』第549号、日本赤十

- 字社、1933 年) 25-27 頁。
- 30 同前、25 頁。
- 31 同前、26 頁。
- 32 森秀臣「米国少年赤十字団の活動」(『博愛 = La humanité』第 547 号、日本赤十字社、1932 年) 28-30 頁。
- 33 さらに、現時点までの調査では、1930 年代の状況を描写している出版物以外の資料や内部の資料を入手することができなかったため、こうした資料の収集と精査を今後の課題にしたい。
- 34 例えば、サラ・グラスフォードは、第二次世界大戦中、カナダの敵国となったドイツに関する記述がカナダ少年赤十字の機関誌に掲載されなくなったと指摘している。(Glassford, S., "Practical Patriotism: How the Canadian Junior Red Cross and its Child Members Met the Challenge of the Second World War," *The Journal of the History of Childhood and Youth*, Johns Hopkins University Press, 7-2 (2014) pp.219-242 による)
- 35 「アジアで最初の赤十字国際会議」(<http://www.jrc.or.jp/plaza/display/vol13/>: 最終閲覧日: 2019 年 10 月 23 日)
- 36 井上圓治「昭和九年を回顧して少年赤十字団員に檄す」(『博愛 = La humanité』第 572 号、日本赤十字社、1935 年) 34-35 頁。
- 37 現時点では、この会議の開催経緯や当時の政治的な背景などとの関係性については、確認できていない点が多く残っているので、今後の検討課題にしたい。ただ、この会議が開催された 1934 年以前にも、東アジア諸国において赤十字と関連する事業が行われていたことはわかっている。例えば、1922 年にはタイ・バンコクにおいて万国赤十字社連盟の第 1 回東洋会議が、1926 年には日本・東京において第 2 回東洋会議が開催されたことなどが、例として挙げられる。
- 38 「フランス少年赤十字主催の人形展覧会」(『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第 10 巻第 3 号、日本赤十字社、1935 年) 15-16 頁。
- 39 「ハンガリー展覧会へ出品」(『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第 11 巻第 1 号、日本赤十字社、1936 年) 16-17 頁。
- 40 前掲榊井「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920 年代～30 年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」、78 頁。
- 41 図 4 は、前掲の榊井「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920 年代～30 年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」があげている情報に基づいて、筆者が作成したもので

ある。

- 42 前掲、赤十字社編『事業年報』(1924～42年)。なお、図5で1925～41年のデータのみを示しているのは、1924年の国別の内訳を確認することができなかったことに加え、欧米諸国との交流が1942年に中止されたことによる。
- 43 同前。なお、図6で1925～41年のデータのみを示しているのは、図5と同じ理由による。それについては注42を参照されたい。
- 44 現時点では、日本とカナダ、ポーランド、フランス、イタリアとの交流回数において、このような変化が生じた理由は定かではない。ただ、カナダ少年赤十字の機関誌の編集者であったジョアン・ブラウンは、1930年代後半に世界各国においてナショナリズムが高揚する中で、人道主義や国際親善を強調する記事などを積極的に掲載することに対して警鐘を鳴らしていたということが、カナダ少年赤十字に関する先行研究で指摘されていることだけはわかっている。(Glassford, S., “‘International Friendliness’ and Canadian Identities: Transnational Tensions in Canadian Junior Red Cross Texts, 1919-1939,” *Jeunesse: Young People, Texts, Cultures*, 10-2 (2018) pp.52-72 による) その影響によって、1934～36年の期間は、カナダの団員たちが通信物の発送の回数を増やしていったという可能性が考えられる。
- 45 前掲、赤十字社編『事業年報』(1924～42年)。
- 46 File: Dr #49(5b) Records – ANRC – Junior Red Cross, International School Correspondence, 1919-44, op.cit. なお、図7で1929～30年、1937～38年における日本の交流の割合を示していないのは、この期間の国別の内訳を確認することができていないからである。
- 47 前掲、赤十字社編『事業年報』(1924～42年)。
- 48 File: Dr #49(5b) Records – ANRC – Junior Red Cross, International School Correspondence, 1919-44, op.cit.
- 49 前掲、榊井「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920年代～30年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」、85頁。
- 50 前掲、赤十字社編『事業年報』(1935年) 112-113頁。
- 51 前掲、赤十字社編『事業年報』(1942年) 12頁；(1943年) 24-25頁。
- 52 井上圓治「少年赤十字団の事業」(『博愛 = La humanité』第532号、日本赤十字社、1931年) 30-33頁。
- 53 井上圓治「少年赤十字に就て」(『博愛 = La humanité』第513号、日本赤十字社、1930年) 36-42頁。

- 54 前掲、手塚「青年赤十字に就て」、8 頁。
- 55 前掲、井上「少年赤十字に就て」、36～42 頁。
- 56 松濤泰旅「教育と少年赤十字」(『博愛 = La humanité』第 569 号、日本赤十字社、1934 年) 101～105 頁。
- 57 松濤は、これを「直観主義の教育」と称し、子どもたちの直接経験に基づいた教育として定義づけているが、本稿においては読みやすさを考慮し、引用文以外のところでは「体験教育」と改めた。
- 58 井上圓治「成功の基礎」(『博愛 = La humanité』第 557 号、日本赤十字社、1933 年) 28 頁。
- 59 前掲、手塚「青年赤十字に就て」、8 頁。
- 60 森秀臣「世界少年赤十字の趨勢」(『博愛 = La humanité』第 597 号、日本赤十字社、1937 年) 22～31 頁。

付記

本研究は科学研究費助成事業（若手研究）課題番号：19K13318 の助成を受けたものである。

ベレジコワ・タチアナ（大阪大学日本語日本文化教育センター）

International School Correspondence of the Japanese Junior Red Cross in the 1920s and the 1930s.

BEREZIKOVA Tatiana

The Junior Red Cross movement started in the USA and Canada during the First World War to assist relief work of the Red Cross and very soon became international and rapidly spread throughout the world. In Japan, the Junior Red Cross was established in 1922 and become popular very quickly. Its major goals were promotion of health, work for community and international cultural exchanges carried through international school correspondence. International school correspondence become especially appealing for the children throughout the world as a unique opportunity to communicate with children in far-away lands and learn more about history, geography and culture of different countries. As the exchanges could had been conducted between all the countries that established the Junior Red Cross (in the 1930s the number grown to 39 countries) the range of possible exchanges was remarkably extensive.

This paper discusses the development of international school correspondence conducted by the Japanese Junior Red Cross in the 1920s and the 1930s, specifically the dynamic and the range of exchanges, the countries that became important exchange partners for Japan, and the significance of the exchanges. As the primary research references we used the journals and official publications issued by the Japanese Junior Red and the Japanese Red Cross and as the additional references – the journals issued by the American Junior Red Cross.

During the rapid growth of the popularity of the Junior Red Cross in 1920s-30s' Japan, the Japanese children had been exchanging different items such as albums and scrapbooks, toys, dolls in national costumes and handicrafts to introduce Japanese culture mostly with Eastern and Western European and North American countries, namely the

USA, Canada, Poland, Italy, France and Czechoslovakia. The exchanges between the USA and Japan proved to be the most numerous and frequent for the both countries.